病葉草紙

わくらばそうし

馬癇（うまかん） 5
気積（きしゃく） 51
脾臓虫（ひぞうのむし） 115
蟯虫（ぎょうちゅう） 177
鬼胎（きたい） 239
脹満（ちょうまん） 303
肺積（はいしゃく） 369
頓死肝虫（とんしのかんむし） 433

馬癇（うまかん）

装画　石黒亜矢子

装丁　野中深雪

組版レイアウト　京極夏彦・紺野慎一

六聚の部類
癩痫に五つあり
心の臓の聚なり
名て馬痫という
是は日を経て起こる虫なり
常に心の臓を立るなり
是に色々立よう口伝、多く有り
前後鍼立つるところ同前なり
少も瀉の心はなし

針聞書／茨木二介（永禄十一年）

乾

その日、藤介は何故か浮かれていた。

理由などない。あるとするならば、天気が良いのにそれ程暑くないだとか、川縁の草が風に戦ぐのが妙に綺麗だったとか、その程度のことであったろう。

藤介はもう二十五になるのだが、いまだ定まった渡世を持ってはいない。強いて言うなら親の手伝いをしているということになるのだろうが、何を手伝っているものか藤介自身が判っていない。

そもそも、藤介の父親は商売をしている訳ではない。

元は薬種問屋の主人だったのだが、疾うの昔に隠居している。

お店は父の弟——藤介の叔父が嗣いでいる。

ややこしい跡目争いがあった訳ではない。深刻と思えるような重たい事情もない。

父の藤左衛門は早くに連れ合いを亡くし、子も居なかった。疾がちだったこともあり、五十を前に店を弟に譲って隠居してしまったという、それだけである。

しかし能く考えて見れば、妻に先立たれたからといって隠居するというのはどうか。どうも理に適った話とは思えない。亡き妻の菩提を弔うため出家したというような殊勝な話ではないのである。逆にそれを契機に身を入れて渡世に励むようになったというのであれば、そういうこともあるかと思えたような気もするのだけれど――。

ただ隠居しただけなのだ。

それに、疾というのもどの程度のものであったのか知れたものではない。少なくとも重病大病の類いではなかったことは間違いない。そもそも疾ではなく疾がちだったというのであるから、大した病気ではなかったのではあるまいか。

まあ――藤左衛門が頑健な性質でないことだけは間違いない。来る日も来る日も何処が痛い此処が痒い疲れた怠いと愚痴を垂れ捲っている。七十の半ばも過ぎているのであるから当たり前かとも思うが、裏を返せばそんな齢になるまで――。

達者で居るということでもある。

まあ某か具合が悪かったのではあろうが、隠居したのは五十前のことであるし、些か早計と思わぬこともない。何故なら、隠居した途端にその疾とやらは徐徐に癒えていったようだからである。結局藤左衛門は数年で本復した。世の中というのは儘ならぬものなのである。

だからといって店を返せとは言えぬだろう。それ以前にその気もなかったのだろうと思う。

藤左衛門という人は、商才はあるが慾がない。理を見極める目も、人を使う情も、難を乗り切る知恵もあるのだが、富貴立身を強く欲する気持ちがないのである。

名誉にも銭金にもまるで頓着がないのだ。息子の藤介の目にもそう映る。

雨風が凌げて、三度の飯が喰えるならそれで十分であると、父はそう思っている。

慥かに、江戸にはまともに飯が喰えぬ者も野晒しで暮らす者も居る。それを思えばそうした安寧な暮らしは幸せなものであるだろうし、その幸せを手にすることも、実のところは簡単なことではないのだ。

それは能く解る。

だが、人を押し退け、蹴落とし、時に踏み台にしてでも伸し上がろう、財を成そうという気概を一切持ち合わせない性格というのは、矢張り商人としての資質を致命的に欠いていると言わざるを得まい。

藤左衛門は、やがて身の周りの世話をするために雇っていた女中の娘を後添えに迎えた。

それが藤介の母である。

藤介は、藤左衛門が五十二の時に出来た子である。

藤介の誕生を機にして叔父は店を返すと言ったそうだが、藤左衛門はそれを拒んだ。藤介が店を嗣げるようになるまでには時が掛る。その前に己が死ねば、結局はまた叔父に頼ることになる。それはそうだろう。ならば藤介を養子にして、成長を待ってでも跡を取らせたいと叔父は進言したようだが、それも藤左衛門は厭がった。

その時の父の心持ちなど藤介には知れぬし、想像すら出来ぬが、世に齢を取ってからの子は可愛いものだと聞くから、何としてでも己の許で育てたかったのだろうと余人は謂う。

それはそうなのかもしれないが、藤介自身は別段父親に可愛がられたことなどない。乳母日傘とはいわぬまでも何不自由なく育てて貰ったことは間違いないが、面倒を見てくれたのは主に母であり、親父に猫可愛がりされた覚えはない。

厳しくされたこともない。

藤介の知る藤左衛門は、絵に描いたような隠居であった。

勿論隠居と雖も何かはしていたのだろうが、何をしていたのかは藤介にも皆目判らない。これといった道楽もなく、偶に茶を点てたりするくらいで、遊里に通うこともなければ芝居見物もしない。植木屋と将棋を指したり、古馴染みと碁を打ったりすることもあるが、取り分け勝負ごとが好きという訳でもないようだった。

何ごとにつけ執着が薄い男なのである。

それでも日を空けずに人は訪ねて来ていたし、八十に手が届こうという今でも、ぼちぼち来客はある。何の用かは知らないが来ることは来る。来れば愉しそうにしてはいるから、人と会うのが道楽ということになるのかもしれぬ。

薬種問屋の方は七八年前に従兄が嗣いだ。叔父の子は藤介より十五ばかりも齢上だから、既に不惑を超している。元気だった叔父も去年西を向いた。叔父の隠居暮らしは僅か五年に満たぬものだったことになる。一方、藤左衛門の方は二十七年以上隠居を続けている。

つまり。

藤介は、隠居の家に生まれた、生まれ乍らにして隠居の子なのであった。

五年ばかり前に母が逝き、今、藤介は隠居との二人暮らしである。

執着の薄い老父は息子の身の振り方に就いても一切の意見をしなかった。藤介は所帯も持たず渡世も定めぬまま、この齢まで茫洋と生きている。

藤介の日課は、長屋の見回りである。

藤左衛門は、店こそあっさり手放したが、何故か隠居する前に建てた長屋だけは手許に残した。八軒長屋二棟から月月入る店賃が藤左衛門の実入りである。

商売と違い、何もせずに放っておいても金が入って来るだろう——それが楽天究まる父の目論見であったようだが、長屋の差配というのはそう簡単なものではない。壊れれば直さねばならないし、店賃だとて催促せねば払わない。店子は出入りするものだから、入れる際は身許やら素性やらも調べねばならない。店子が不始末を仕出かせば、それは大家の責となるのだ。

これが中中難しい。

親しくなれば情が涌く。厳しく当たれば諍いになる。遠慮すれば付け上がるし、杓子定規に当たれば嫌われる。下手に出つつ言うべきことは言う、その匙加減が難しいのだ。

死ぬまでは母の仕事だった。

母の千代はどちらかといえば暢気な性質で、凡そ人あしらいが得手とは思えない人だったのだが、どうした訳か長屋に関わる諸事は上手く回していた。母亡き後は藤介が引き継いだのだが、気苦労ばかりが募って些細とも思うように運ばない。藤介が些事に思い悩む気質であったなら、疾うに気鬱になっていたことだろう。

幸いにも藤介は日和次第で機嫌が良くなるような簡単な男であるから、どれだけ揉めごとが起ろうともこれといって行き詰まるようなこともなく、日日遣り過ごしているのである。

因幡町藤左衛門長屋は、八丁堀にも程近く、治安は悪くない。

その所為か店子の身持ちも悪くはない。

貧乏長屋の店子などというものは大概は赤貧であるから、何年も店賃未払いのまま居座られたり、一文も払わずに踏み倒されたりすることも少なくないと聞く。のみならず世遁げや首吊りまであると謂うから、そうしてみると藤左衛門長屋は平穏ではある。

店子の凡そ半分は大工だの左官だのの職人で、これは真面目だから、仕事さえあれば金払いは良い。お針子をしている後家、豆腐屋の通い、煮売り屋――この辺りも店賃を溜めることは少ない。傘張りをしている喰い詰め浪人と辻占の親爺は催促をしないと払わない。渡り鳶職は博打が好きで、これは半年ばかり滞っている。

問題なのは平次とお志乃という兄妹である。

平次は、世に謂うところの下っ引きである。

駿河台の伍平という御用聞きの手先として働いているのだが、まるで実入りがない。そもそも岡っ引き自体に決まった俸禄がないのだから、これは仕方がない。親分からしてからっ穴なのである。岡っ引きはお上の御用をしているとはいうものの、ご公儀に雇われている訳ではないのである。何か起きた際に駆り出されて、その都度その都度町廻り同心から小遣いが渡されるだけなのだそうだ。

平次のような下っ引きが貰うのは、そのお溢れ――僅かな手間賃だけである。何ごとも起きなければ、鐚銭一枚稼げはしないのだ。

伍平は女房に汁粉屋を営らせて糊口を凌いでいるのだという。平次の妹もあちこちで働いているが、手に職がある訳でもないし、愛想はあるが何処か一本抜けた娘なので、どの店も長続きはしない。実入りは良くない。

越して来て三年になるが、ほんの幾度しか店賃を入れてくれない。

店立てを喰らわせようとも文句は言えぬ筈である。それでも、下っ端とはいうものの長屋に十手持ち――常日頃から持っている訳ではないのだけれど――が居るというのは、悪いことではない。藤介はそう思う。だから追い出したくはない。

それ以前に、齢が近い所為か平次とは妙に気心が知れてしまったのである。志乃の方も気立ては良いし、健気な娘ではあるのだ。宿替えして来た頃はほんの女童だったのだが、もう十七八になるのだろうか。

どうも邪険にしづらいのだった。

そうはいうものの、このまま無料で住まわせている訳にも行くまいとは思う。他の店子にも示しが付かぬ。何としても一月分でも取り立てたいと、それは毎日のように思う。

思うだけで何も言えない。無い袖は振れぬと言われれば、ハイそうですかと引き下がるよりない。娘を売り飛ばしてでも借財を返せなどという烏金のような科白を、藤介あたりは到底口に出来るものではない。

これは、真面目に考えるなら深刻な事柄ではあるのだろうが、実のところ藤介はそれ程気に病んではいない。

それもこれも暮らしに困っていないからだとは思う。

隠居の蓄えはそれなりにあり、朴念仁は無駄金も使わないから、長屋の店賃は減った分が戻る程度で、ほぼ余禄である。藤左衛門はそもそも蓄財を増やそうなどとは鼻毛の先程も思っていないのだ。その辺は藤介も変わらない。ただ、藤介が喰い潰しているのは親の貯めた金ではある訳で、その辺りのことを考えると何とかしなくてはなるまいとは思う。

これも思うだけである。

実際、藤介が別の渡世を始めるなり家を出るなりしたとして、困るのは藤左衛門なのだ。あの隠居には天地が引っ繰り返っても長屋の差配など出来はしないのだ。難儀なことである。

まあそのうち何とかなるだろう、いずれなるようにしかならぬだろうしと、藤介は念仏のように称える。称え続ける。

そんなことを倩 考えているうちに長屋に着いてしまった。近いのだ。

天気が良いから職人は居ない。

家裡で働く者も精を出しているようである。

ちらちらと覗き乍ら井戸の前まで進む。何だかんだと手入れはしているし、月に一度は溝浚いもしているから小綺麗ではある。藤介は他の長屋を具に見たことなどないのだが、綺麗な方だという自負だけはある。

井戸端では煮売り屋の女房が洗濯をしていた。

「お吉さん、毎日忠実なことだねえ」

この女房は朝でも晩でも来れば洗濯をしている。

「ナニ、宿六が直ぐに汚すのさ。あれは弱いくせに酒を飲むからね、喧嘩こそしないけども転んだり溝に落ちたり、道ッ端で寝ちまったりサぁ。まあ、あれは他に愉しみがないからね、いいンだけどもさ。着替え買う銭も飲んじまうからねェ」

一応客商売だからとお吉は笑う。

「文吉ッつぁんは仕入れかね」

「ああ、仕入れだか金策だか」

「金策ってのは何だね」

「何もクソもないサね。全部飲んじまったから種が仕入れられんのさ。困ったものだよ」

「いやまあ」

藤介はそうかね、としか言えない。

先日、今月分の店賃を徴収したばかりである。

「どうなのかね。少しは良くなるのかね」

お吉は洗濯物を固く絞る。

雫が陽光を弾いて綺羅綺羅と光った。

「良くなるって何がだね」

「何がって、世の中さ。ほれ、御老中様だかが代わったのだろう」
「ああ」
老中田沼意次が失脚したのだと聞いた。
「人が代わっただけで何が変わるものかね」
「そうさねえ。妾はそんな偉い人のことは知らないけども、まあ、たんと賂取ってたそうだし、これを機会にぱっとバラ撒いてくれたりしないもんかね」
「何を」
お銭さあとお吉は笑い乍ら言う。
「まあこう何でも値が上がるとさ。火ィ点す爪まで干からびちまってねえ。この調子じゃ店賃だってあんた」
そこでお吉は真顔になって藤介に顔を向けた。
「上げる気じゃあないだろね、藤さん」
「上げないよ」
値上げは十年していない。
相場は知らないが、多分この長屋は他よりも廉い筈である。
「ならいいけど」
其処の勘助長屋なんざ毎年値上げだよゥとお吉は言う。
「そんなに上げるかね」

「見習うんじゃないよ藤さん。あの大家は直ぐに上げくさるのサ。だから誰も店賃なんか払わないんだよ。あんな業突張りに呉れて遣る銭なんザ一文たりともあるもんかと――」
「いやいや」
藤介は苦笑する。
「そりゃあ誰も払わないから値上げするのじゃないのかね。あのね、大家だって霞喰って生きてる訳じゃあない、暮らしがあらァね。ま、うちの店子はどちら様もちゃんと払ってくれるからね。有り難い話だよ――」
世辞とも何ともつかぬことを言いつつ、藤介は一番奥の所帯に気を遣る。
右側は三月程前に越して来たばかりの善兵衛という年寄りで、十五六の孫娘と二人暮らしである。元は担ぎの呉服屋だという話だったが、六十を過ぎたのでもう殆ど働いていないらしい。とはいえ、長年稼ぎ貯めた小金があるから当面の暮らしには困らないという。店賃も前払いで一年分払ってくれた。
能く肥えた恵比寿顔の好好爺である。
孫の方は、痩せた、口数の少ない温順しい娘で、お初という。
「善兵衛さん処は、お留守かね」
人気がない――ように感じる。
「サアねえ。妾ンとこは離れてるからね。まああの爺様は何の渡世か知らないけども、いつも愛想が好いし、そりゃ裕福そうだけどもね」

「そうかね」
「そりゃそうさ。能っく高価そうな弁当なんか買って来るしね。コレも居るんだろ」
お吉は小指を立てた。
「そうなのかい。いや――だって」
いい齢だろうと藤介が言うと齢は関係ないだろよと言ってお吉は歯を剝いて笑う。
「此処の大家は枯れてるけどさ、それでもお前さんだって五十過ぎてからの子だろ。ま、お盛んたってあの齢だから流石にねえ。二三度は見掛けてるから、月に一度くらい通って来る感じかね」
「女の方が通って来るのかい」
「来るねえ。楚楚とした婀娜っぽい年増だよ。金持ってんなら外に囲うとかすりゃいいのにって、おきんちゃんと話してたのさ」
「しかし、孫娘が居るのだろうよ」
長屋は狭い。間仕切りも何もあったものではない。何かと具合が悪いのじゃないかねと藤介が言うと、そんなことは知らないよとお吉は返した。
「こんな薄い壁一枚でも壁の向こうは余所の家さ。一歩裡に入りゃあ見て見ぬ振り聞いて聞かぬ振りが長屋の決まりごとだよ」
それはつまり、戸の外で起きることであれば見てもいるし聞いてもいる――ということなのだ。井戸端雀は口性ないものなのである。

「まあねえ。いつだって機嫌良くしてるしね、余程浮き世が愉しいのさね。あやかりたいと思わないでもないけどね。妾だったら、金があるならこんな長屋なんかじゃあなく、家でも買うけどね。だからさ、何か陰で悪いことでもしてんじゃないかとかさ」
「悪いこと――かね」
妬みさ妬みとお吉は笑う。
「妾らァみんなその日暮しさ。稼いで喰うて喰うて稼いでの繰り返し、一日休みゃ喰い逸れだあね。それが、大した働きもせんでお飯が戴けるなんてねえ。それだけでもう夢みたいな話だろ。それにあんな、仏様みたいな顔してるしサ、陰口のひとつも言いたくなるってものさ。でもね、まああの爺様は何を言っても肚立てることもないし、思うに善い人なんだろうね。この間もお団子呉れたしね」
巧くやってはいるようだ。
藤介は新しい住人が来る度に心配になる。
店子選ぶなら懐具合より人柄を見ろというのが、母の教えである。
大家と店子が揉めるのはいってみれば当たり前のことだし、それに関していうなら大家は謂わば当事者である訳だから、これは仕方がない。しかし住人同士の揉めごとは厄介である。仲裁するにしろ追い出すにしろ、面倒なことこの上ないというのである。
煩瑣いだの臭いだの、喧嘩の種など捜さずとも何処にでも転がっているものであるし、坊主憎けりゃなんとやらで、一度拗れた人と人の仲は中中戻るものではないからだ。

「孫は元気がないけどね。可愛らしい顔してるけど蚊の鳴くような声しか出さないからね。先月味噌貸した時もさ――あ」
お吉は踏まれた蛙のような顔になった。
「あんた、藤さん。よもやあの子に懸想してんじゃないだろね。ありゃ未だ女児だよ。痩せっぽちだしね。少ォしぼおっとしてるけど、志乃ちゃんの方が」
「な、何を言ってンだよ。気の抜けた邪推は止しとくれ。まあ大事な店子だ。新参は色色と気になるからね――」
奥の左側。
こちらも人の気配は全くない。だが、これは常態である。それでいて留守でもない。お吉も立ち上がって腰を伸ばし、同じ方に視軸を投じた。
「また行くのかい。あのうらなりのとこ」
「まあねえ。好きで行く訳じゃあないが、生きてるかどうか――一応確かめとかなきゃなあ」
「この時期は腐るからね」
死んでたりしちゃ苦情の元だとお吉は言った。
まったくその通りである。
藤介は手を挙げ、お吉がうらなりと呼んだ男の住む左奥の戸口の前に立った。
音もしないし、窓も塞がっているから中も見えない。竈も何もかも取り払っており、内側に棚を作ってしまっているのだ。困ったものである。

「先生、開けるよ」
声を掛けても返事はない。
がたがたと音を立てて戸を開ける。建て付けが悪い訳ではなく、左右に棚があって、土間にまで何やら置いてあるので開け難いのだ。畳は見えない。箱だの何だのが所狭しと積み上げてある。押し入れも何もあったものではない。奥の方は天井にまで届いている。文字通り足の踏み場もない。
真ん中に書き物机があり、百目蠟燭が燈っている。
未だ午前だというのに――である。
「どうだろうねえ。この有り様は。世間は昼間なんだからさ」
「ああ」
そこで漸く、書き物机に向かっていた久瀬棠庵は顔を上げた。
「これは藤介さん。何か御用ですか」
「御用ですかじゃないだろうよ先生」
座る場所もないので土間に伏せてある丈夫そうな大桶の上に座った。ここ数日、藤介はこの桶――樽かもしれない――の上に座ることにしているのである。
「何か喰ったのかい」
「藤介さんが呉れた餅を食べましたが」
「いつ喰ったんです。餅を持って来たのは昨日の朝だけどね」

戴いて間もなく食べましたと棠庵は答えた。
「つまり丸一日喰ってねえってこったよね。仕方がねえなあ。そんなら今日もまた何か持って来りゃ良かったなあ」
「藤介さんに施しを受ける謂われはないですから、どうぞお気にされずにいてくださいな。それより、何の御用です」
「何の御用ってさあ。御用はね、あんたの様子見だよ。って、昨日も一昨日も来てるじゃないか。ずっと通ってますよ、あたしは」
「そういえば毎日いらっしゃいますねえ。今年に入って藤介さんが来なかった日は——合わせてたったの十日ですよ」
「か、数えてるんじゃあないよ」
棠庵は、多分藤介よりも若い。未だ二十を少し出た程度だと思う。
渡世は——ない。働くどころか家から出ない。のみならず、動かない。ほぼ毎日顔を出しているけれど、立ち上がったところさえ見たことがない。
書物を読んでいるのか何かを拵えているのか知らないが、二六時中、年がら年中、夏でも冬でも、ずっと引き籠っている。常に同じ姿勢である。いや。
「もしかしたらあんた、昨日からずっとそうしているのじゃないだろうね。観たところ塵ひとつ動かした様子がないようだけども——ひょっとして寝てないのかね」
「寝ています。眠くなったら寝ます」

「横になる場所がないように思うけどもねえ。何をしてるのか判らないけどもね、動いた様子がないよ。厠にも行ってないのじゃないか」
「ああ、行かねばならぬと思っていました」
「何だよそれは」
「あまりものを喰わぬので、それ程催さないのです。その上に気付かない。最前よりそろそろ厠に行くべきだと思ってはいたのですがね。どうも切りが悪くて」
「いやいや。切りが悪いって、もしや、昨日から——ずっとかい」
この本は長いのですよと棠庵は言った。
「唐国の本なので、判らぬ言葉や文字がありますし、どうにも勉学が捗りません」
「あのなあ先生よ。棠庵さんよ」
「何です」
「他人様に説教するような身分じゃあないよ、あたしはね。そんな柄じゃあないのさね。でもね、ここは言わせて貰いましょう。人ってのはね、喰って寝て、糞放って生きるもんだよ」
「それは——真理ですね」
「そのためにみんな働いてるんだ。働かなくちゃ飯は喰えない。それが天下の仕組みじゃあないのかね」
「そうでしょうねえ」
あんたはどうだと問うと、日日こうして仕事をしていますと棠庵は答えた。

「何もしていないじゃないか」
「していますよ。今は学問をしています。薬の工夫もしますが、そうですねえ。ものを作ったり売ったりはしていませんね」
「そういうのを渡世と謂うのだろうに」
「いいえ。そんなことはありませんよ。そうですねえ——例えば僧侶は何も作りませんが、仏道に帰依し、日日修行をされていますよ。修行は立派な仕事です。仏の教えを広めるためになさっているんですから」
「坊主は葬式が商売だろうさ。ありゃ、袈裟ァ着てごにょごにょと経文唱えてりゃ銭になるんだ。だから喚んでもないのに盆だの命日だのに来るのさ。来りゃお布施を簒奪って帰るじゃないか。それが渡世さ。ならもの売ってるのと変わらないだろよ」
「それは違いますよ。布施というのは出す方の功徳ですからね。僧の方が要求したのでは布施にならない。そもそも仏者というのは——」
面倒臭い。
「まあいいよ。あんたはどうなんだ。其処で本を読んでると誰かが布施してくれるのかい」
「藤介さんが餅を持って来てくれます」
柳に風とはこのことである。
「まあ、あんたは一年分の店賃を先渡ししてくれてるしね、大家としちゃあ文句はないさ。ないんだけどね」

棠庵は、何故か金に困っていない。
去年の正月に宿替えして来たのだが、店賃を月月渡すのは面倒だから五年分でも十年分でも先に出すなんぞと言う。だからせめて年払いにしてくれと頼んだのだ。
最初は儒者か何かで塾でも開くのかと思っていたのだが、そうではなかったらしい。本人曰く、強いて言うなら本草学者だそうである。春先と秋口に泊まりがけで何処かに出掛ける以外は、ずっと屋内に籠っている。屋外で目にしたことはない。
「と——いうか、暑くないのかね。風通しゃ悪いし、この有り様じゃあ掃除も出来ないよ。汗かいたって行水ひとつ出来やしないでしょうや。湯屋くらいは行ってるのだろうね」
「ええ。行きますよ。生きていますから垢は溜る」
「ならいいけどね。まあ、男寡に蛆が涌くなんて謂うけども——どういう訳かあんたの処は臭わないから」
「蛆の餌になるようなものはありません。食物も置かないので蠅も入って来ないですよ。水甕の水も毎日換えていますから子子も涌かない。だから蚊も出ない」
「あんた自身に虫が涌くって話だよ。夏場でもこんな狭い処で飯も喰わず厠も行かずに座りっ放し、しかも昼間から蠟燭なんか点けて、ですよ。未だね、世間は暑いんだよ」
「暑いですねえ」
「熱が籠っちまうだろうさ。煮えっちまうよ。いやいや夏場でなくたってさ、こんな暮らしが躰に良い訳ないでしょうよ。あんた、ぽっくり死んじまったらどうするんですよ」

死なないと思いますがねえと棠庵は言う。
「恍惚けたこと言うやねえ。若いからって死なないとは限らないだろ。死んだらそれこそ蛆が涌くのさ。後始末すンのはあたしだよ。死人の臭いてぇのはね、抜けないものなんだよ。その上、この瓦落多の山ァ、一体どう始末すりゃいいんだよ」
「まあ、あまり考えたことはなかったですが、そういうこともあるかもしれないですねえ。慥かにご面倒をおかけするのは心苦しいですね。そうだ、私の死後、この家財の始末が付くように人を頼んでおきますよ。葬式法要は要りませんが、そうですね、何処かに埋めては貰いたいですから、手間は掛かるなあ。何なら長屋の皆さんと藤介さんに先に手間賃を――」
「そういう話じゃあないって」
浮き世離れもここまで来ると処置なしだと、藤介は呆れた。
「あんた、先生。別に死んで欲しい訳じゃあないから縁起でもないこと言わないでおくれ。兎に角、耄碌爺じゃあないんだからさ、もう少し生き意地汚くして欲しいもんだよ。あたしも親父もね、世間様からは同じように謂われるんだが、あんた見てると格が違うよ。何でもいいから先ずはお天道様の下に出な」
「いや、しかし」
「しかしも案山子もないよ。そうだ、取り敢えず便所に行きな、便所」
「ああ、それはそうですねえ」
そう言うと棠庵はゆるりと立ち上がった。

骨と皮ばかりである。
「危ないから蠟燭を消しな。火事出したら大家が責を負うんだから。ほら、好い天気で気持ちが良いぜえ」
蠟燭を吹き消し袖を引いて外に引っ張り出すと、棠庵は少しふら付いて、眼を細めた。
肌の色が抜けている。色白というより透けている。
肺病病みの遊女の方がまだ元気そうである。
「他人に言われなきゃはばかりにも行かないなんて、どう考えたって怪訝しいと思わないのかい。あんた――」
そこまで言って振り向くと、真向かいの善兵衛方の戸がごとごとと開いた。
中からゆらりとお初が出て来た。
棠庵より顔色が悪い。そもそもお初も痩せこけているのである。
その上、眼も虚ろだし身嗜みも乱れていた。
お初は暫し朦朧としていたが、藤介を認めると松風のようなひゅうひゅういう声にならない声を出した後、
「善兵衛を殺してしまいました」
と、言った。